

のであると見得ることは上に述べた所によつて首肯されることゝ思ふ。然もこの藍市城即ち監氏城に月氏が都しては、大宛からの距離が近きに失するから、これは誤と見るの外なく、而してこの誤は前述の如く前漢書が史記の記事の體裁を改めようとした事によつて生じたと見るのは極めて自然の解釋と信ずる。或は監氏はカンダ (Kanda) 即ちマラカンダ (Maracanda) の略で、サマルカンドに當るであらうとも考へられぬではあるまいが、マラカンダを單にカンダと呼んだといふことは、トマシエク<sup>⑦</sup>がプリニウスの書 *Naturgeschichte* に見えるパンダ (Panda) をカンダの誤と見てかく解釋した以外には見受けられないやうで、一概に信じ難いし、支那で後にサマルカンドを康國と呼んだのはそのカンドを寫したに外ならぬといふ考は屢々諸家<sup>⑧</sup>によつて唱へられる所であるが、余はこれを以て古くからソグド地方を呼ぶ名の Kang<sup>⑨</sup> を寫したものに外ならぬと信ずるから、これもその例證とするには足りない<sup>⑩</sup>と考へる。果して此の如しとすれば、甘肅から伊犁に、伊犁から更にオクサスの方面に遷つた月氏については、「乃遠去過大宛、西擊大夏而臣之、遂都媯水北爲王庭」といふ史記大宛傳大月氏の條の記事以外には何事も知ることを得ないのであると見なければならぬ。即ちかの丘就却・閻膏珍及び迦膩色迦王などの出現によつて大發展を遂げた所謂大月氏王國といふものを、甘肅省の一部に據つた月氏種族の後であると見るのは、根も無き夢物語であつたと見なければならぬことになる。かく見てこそ後漢書西域傳に前述の如く「諸國稱之皆曰貴霜王。漢本其故號<sup>⑪</sup>言大月氏云」と斷つてあるのを正解したものといへるであらうと思ふ。

さてかく見ることが西方の文獻に見える所と抵觸しないかについてまた一考して見なければならぬ。漢史の月氏に相當する名として西方の記録に見える Geth, Goth, Massagete 等が Deguignes, Rémusat, Klaproth, Franke